

堅香子草かたかこの花を攀よじ折りし歌一首

4143 ものふの八十娘子やそをとめらが汲くみ乱まがふ寺井てらゐの上うへの堅香子かたかこの花

【右注】

\* 堅香子草：根から片栗粉をとったカタクリ。古語に「カタコ」ともい、それが方言も残る。

\* 攀じ折りし：この前の歌(4142)にも「柳黛を攀じて」とあり、刃物で切り取るのではなく、手でよじるという動作は、その物との関係を近く感じさせる。

【語釈】

\* ものふのふの：「ものふ」が多いことから「八十」にかかる枕詞。

\* 八十娘子ら：八十は多い意。多くのヲトメたち。間接的にカタクリの群生をも意味している。

\* 汲み乱ふ：ヲトメたちが入り乱れて(水汲みをする)。寺院の祭りの水かは不明。

\* 寺井：寺院の水汲み場。「寺井」という固有名詞になった井泉があったのかも知れない。何寺と知れないが、あるいは越中国分寺だったかも知れない。

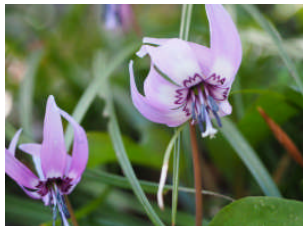
【総釈】

前後の関係から天平勝宝二年(750)三月二日に詠まれた歌で、その前日に詠んだ歌が「春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子」(4139)であった。庭の植木の桃の花に対して、カタクリは山野草である。当然、平城京の山にもカタクリの花は毎年咲いていたはずだが、万葉集ではこの一首のみで貴重な例となっている。越中という雪国に来て、待ち遠しい春に咲いたかれんな花が、都の自然とは違う新鮮な印象を与えたのだろう。地方の生活が家持に新しい自然の風景を発見させたのである。

この歌では、カタクリの花の咲く風景を井泉に水汲みに集まる娘たちと合わせて歌う。カタクリは片栗粉をとるように人々の生活とも密接な花だから、水汲みという民衆の生活にもふさわしい。しかも「八十娘子ら」とあるように、娘たちは多く集ってにぎやかな様子である。その上の山の斜面にはカタクリの花が群生していたのだろう。カタクリの花の群生は、娘たちが集まっている華やかな様子と対比されている。

ただし、右注に「攀じ折りし」とあるように、家持は、じつさいは一本を花をねじ折っただけのようだ。その一本の花から、想像をふくらませて、娘たちが楽しくにぎやかに水汲みをする情景のなかにカタクリの花の群生を配置して一枚の春の絵を描いたのであろう。

余談ながら、下向きに咲くカタクリの花の中をのぞくと花弁の内側に面白い模様が見られる。群生する花も良いものだが、近づいて見るとまた新しい発見がある。



遥かに江を 浜る 船人の 唱を聞きし歌一首

4150 朝床あさどこに聞けば遥はるけし射水川朝漕あさこぎしつづつ唄うたふ舟人ふなびと

## 【右注】

\*江を浜る船人：川をさかのぼって行く小舟の船頭。流れの緩やかな射水川の下流をさかのぼっているであろう。

\*唱：「歌」すなわち和歌と区別して、後世でいえば「舟歌」のような民謡を指す。これに対する動詞が「唄ふ」。

## 【語釈】

\*朝床に：朝の寝床で。

\*遙けし：遠くから聞こえてくるさま。空間的な距離を感じさせることば。

\*朝漕ぎ：朝早くから船頭が舟を漕ぎ出しているのである。

## 【総釈】

これもカタクリの歌と同じ天平勝宝二年（750）三月二日に詠まれた歌である。

土屋文明はこの歌について、「嫌味もないが、これだけでは平板にすぎ、感動の盛り上がる場所もない」と批評するが、万葉時代の地方庶民の生活の一コマをあざやかに感じさせてくれるいい歌である。われわれには聴覚のみによって風景を感じさせる歌である。季節は春、遠くから聞こえてくる舟歌ものんびりした感じがする。一方の家持は、「春眠曉を覚えず」（孟浩然）とも歌われるように、国庁の館のベットのうえでふと目覚め、舟歌を耳にした。「朝床」と「朝漕ぎ」。「朝」を二度使っているが、それぞれ横たわって休む身体と、立ち上がって労働する身体という二つの対比がある。

都から赴任した越中の家持は旅の人である。中国の詩人も旅に舟歌を詠んだ例のあることから、これもまた漢詩の知識によるものであろうと見る見解もある。そうしたことも充分考えられるが、万葉集の先例としては海に舟を漕ぎ出す海人の音を詠んだ山部赤人の歌などもあって、それも参考になつていられると思われる。

大伴家持は「唄ふ舟人」の歌を詠んだ翌年、天平勝宝三年（751）七月十七日、少納言に任命され、これによって彼は越中国守の任務を解かれて都へ帰ることになった。

天平十八年（746）七月に越中に着任してからまる五年の月日が流れた。卷十九・4250番の右注によれば、出発は八月五日。越中の「大帳使」を兼ねての出発であった。